



筑紫女学園大学リポジト

幼児教育科短大生の子ども観：母親との比較

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 博子, HARADA, Hiroko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/721

幼児教育科短大生の子ども観

—— 母親との比較 ——

原 田 博 子

Junior college student's views of
the children of age 3-5 years (II)

Hiroko HARADA

はじめに

少子化が進む今日、地域社会における連帯感の希薄化により地域の子育て機能も低下してきた。このような社会状況の変化の中で、多くの子育て家庭が子育てに大きな不安を感じ、育児不安を訴える母親、育児ノイローゼに陥る母親も増えている。また、母親同士の疎外感や社会参加出来ない焦りなど子育て中の母親に関する問題もある。¹⁾このような状況を受けて、平成11年に『保育所保育指針』²⁾が改訂された。そこには“保育所における子育て支援及び職員の研修など”という章が新たに設けられ、保育所は通常業務に加えて、地域における子育て支援の役割をも担うと明言された。その“地域における子育て支援”の1つとして、乳幼児の保育に関する相談・助言を保育士が行うことになっている。保育に関する相談・助言をするにあたって保育士は十分に母親のことを理解しておくことは言うまでもなく、子育てをしている母親がどのように子どもを捉えているかという母親が持つ子ども観も知っておかなければならないであろう。また、保育士も母親も子どもを育てると同じ行為をしているが、保育士は集団の中で子どもを向き合いながら保育をしており、一方母親は保護者として我が子と向き合いながら子育てをしている。このように子どもを育てると同じ行為でも保育者と親という立場が違えば、子どもの捉え方に違いが

あるのではないだろうか。子育て支援を行うにあたって、保育者と子育てをしている母親の子ども観の違いをも保育者が知っておくことも母親を支援する上で必要なことだと思われる。

1 子ども観の先行研究

永澤 (1996)³⁾ は母親を対象に子ども観と養育態度の関係を分析している。永澤は独自の子ども観尺度を作成し、因子分析の結果から子ども観として「一個の人間」「否定的な存在」「愛しい存在」「親の私物」「不完全な存在」「無知な存在」という6つの因子を見出した。そして平均値の差による検定の結果、子どもの発達年齢によって子ども観に差がないこと、母親の年齢によって子ども観に差があること、子どもの人数によって子ども観に変化があることを明らかにした。また、母親の「子ども観」と養育態度の関係は子どもを「一個の人間」と捉えている母親は子どもに対して支配的でない態度を示していることや子どもを「否定的な存在」と捉えている母親は子どもに対して拒否的、支配的、不一致な態度を示していることなど母親の養育態度と子ども観には密接な関係があることを明らかにした。

嘉数他 (1997)⁴⁾ は保育科短大生を対象に子ども観と保育職志望度との関連を分析している。嘉数他は永澤 (1996) の子ども観尺度を使用し、因子分析の結果から「いとおしい存在」「個性的存在」「煩わしい存在」「未熟な存在」「親の所有物的存在」「尊敬すべき存在」「教育すべき存在」という7つの因子を見出した。そして保育職志望者・非志望者・無回答 (わからない) の3群で分散分析を行っている。その結果、保育職志望群の方が「いとおしい存在」「個性的存在」「未熟な存在」の因子において平均値が高いことを明らかにしている。

島袋他 (1998)⁵⁾ は保育科短大生を対象に子ども観と保育職志望度・地域特性との関連を分析している。島袋他は永澤 (1996) の子ども観尺度と友利 (1995) の尺度を加味し、沖縄県特有の項目も追加した子ども観尺度を作成し、価値体系と概念体系という2つの観点で因子分析を行っている。価値体系では「立身出世」「親族主義」「伸び伸びとした存在」「自己制御」という4つの因子を見出

し、概念体系では「可能性」「否定的」「あてになる存在」「自立的存在」「個としての存在」「了解可能な存在」という6つの因子を見出している。さらに沖縄県と愛媛県を地域特性とし、保育職志望と子ども観の関連性を検討している。その結果、沖縄県では「否定的な存在」が負の相関関係にあり、保育職志望度が高いほど子どもについて否定的に捉えないということや愛媛県では「立身出世」が有意な正の相関関係にあり、保育職志望度が高いほど子どもに立身出世を願うことが明らかにされた。

島田他(1999)⁶⁾は保育科学生を対象に子ども観とライフスタイルの変化について分析している。島田他は永澤(1996)の子ども観尺度に独自の項目を加え子ども観尺度を作成した。さらに飽戸(1987)と山本(1995)を参考にライフスタイル尺度を作成した。因子分析の結果、子ども観として「否定的存在」「一個の存在」「愛しい存在」「能力ある存在」という4つの因子を見出した。また、ライフスタイル観として「ファッション・トレンド志向」「リーダー志向」「生活享受志向」「他者志向」という4つの因子を見出した。その結果、ライフスタイルと子ども観には関連性がないことが明らかにされた。また、子ども観の変化という観点からライフスタイル・子ども観・影響因子について平均値の差による検定を行っている。その結果、ライフスタイルについては子ども観が大きく変化した群のほうがより達成志向的で、リーダー志向があり、より個性的で自分らしい生き方を探求しようとするライフスタイルを持っていることが明らかにされた。また、子ども観については子ども観が大きく変化した群の方がステレオタイプ的な子ども観を持ってはおらず、子どもの能力に対する尊厳の念を抱いており、子どもを肯定的に理解しようとする特徴を明らかにしている。子ども観の変化に影響を及ぼした要因としては、定量的分析の結果、幼稚園実習の影響が相対的に高いということ、また定性的分析の結果、実習という直接経験が可能な場での子どもとの接触や観察を通して、子どもに対する見方や捉え方を変えていくことが明らかにされた。

2 子ども観の定義

児童観とは一般的に「児童をどう理解し、どのような存在とみるかといった児童に対する基本的な考え方および態度」⁷⁾のことを言う。しかし、児童とは一般的に出生後から18歳未満を指し、年齢にかなりの幅がある。そこで年齢の幅を狭くし、3～5歳までの子どもを“どのような存在とみるか”という意味で「子ども観」という用語を使用することにした。

3 目的

以上のように先行研究では調査対象者が母親または保育者に限定されており、保育者と母親との違いを比較したものを見つけることはできなかった。そこで本研究では子ども観を“子どもをどのように捉えているか”と定義し、数ヶ月後には保育者となる幼児教育科短大生（以下 保育短大生と称す）と母親の子ども観を比較することによって保育者と母親という立場の違いでどのような点に違いがあるのかを明らかにすることを目的とする。

方 法

1 質問紙作成のための予備調査

〈対象者〉

- ① 乳幼児期の子どもを持つ親 13名
- ② 乳幼児期のクラスを持つ保育士 7名
- ③ 1999年度幼児教育科2年生 11名

〈属性〉

- ① 男性5名女性8名（事務職11名 教職2名）
- ② 男性2名女性5名（現職7名）
- ③ 女性11名

〈手続き〉

- ① T校職員に質問紙を直接手渡し、1週間後直接受け取った。
- ② F市内の保育園2園へ質問紙と回収用の封筒を送り、郵送にて返却してもらった。
- ③ 学生へ直接質問紙を手渡し、その場で回答を求めた。

〈調査時期〉

- ①～③ 1999年5月

〈調査内容〉

- ・子どもに絶対すべきこと
- ・子どもにしたほうがよいこと
- ・子どもにしなくてもいいこと
- ・子どもにしないほうがいいこと
- ・子どもに絶対にしてはいけないこと

以上の5問について‘子どもはどのようなものだから’という理由をつけて自由記述で回答を求めた。その回答と永澤（1996）の子ども観尺度の項目内容を参考にし、子ども観に関する質問項目を33問作成した。なお、以下の1問は保育短大生と母親によって質問項目の表現を変えている。

(保育短大生)

- ・子どもは保育士・幼稚園教諭を成長させる

(母 親)

- ・子どもは親を成長させる

2 本調査

1) 対象者

表1 対象者数

		人 数
保育短大生	2000年度幼児教育科2年生	115名
母 親	① 福岡県 K 市内	78名
	② 福岡県 D 市内	45名
	③ 福岡県 O 市内保育園	26名
	①～③の合計	149名

2) 属 性

表 2 対象者の属性

保育短大生	専門職（幼稚園教諭 保育士）になる専門教育を受けている 保育実習10日×2回 教育実習12日×1回 の経験がある
母 親	①福岡県 K 市 3 歳児検診来所者
	②福岡県 D 市 3 歳児検診来所者
	③福岡県 O 市内保育園 3 歳児クラスの保護者

2-1) 保育短大生の属性

①自主実習の経験

自主実習を行っていない保育短大生は101名で1～3回行っている学生は合わせて14名であった。(図1)

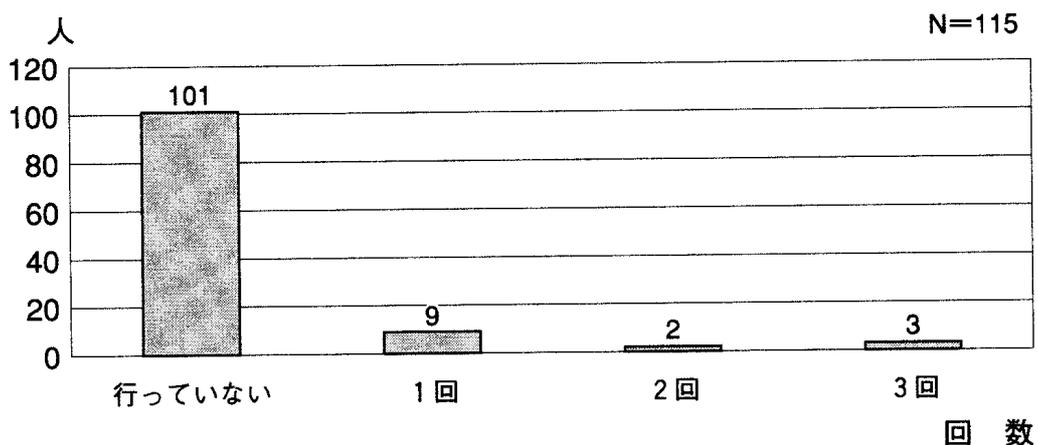


図1 自主実習の回数

②3～5歳児に実習以外で接する日数

3～5歳児に実習以外で接する日数を1ヶ月あたりで割り出した。全く接することがない保育短大生は77名と一番多く、10日以上の学生は10名いた。(図2)

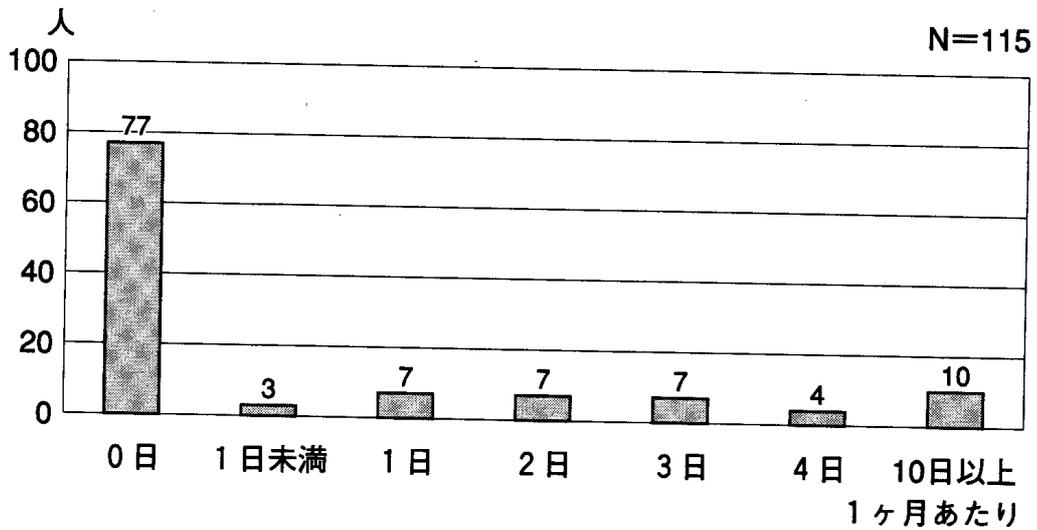


図2 3～5歳児に実習以外で接する日数（1ヶ月あたり）

③就職の希望

専門職につきたいという希望を持っている保育短大生は88%でほとんどの学生が専門職を希望している。(図3)

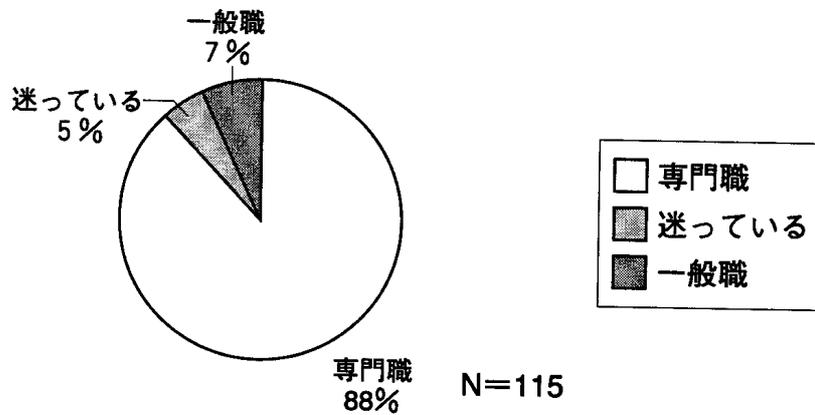


図3 就職の希望先

2-2) 母親の属性

①母親の年齢

30～34歳が62人と一番多く、次いで35～39歳が39人、25～29歳が37人であった。(図4)

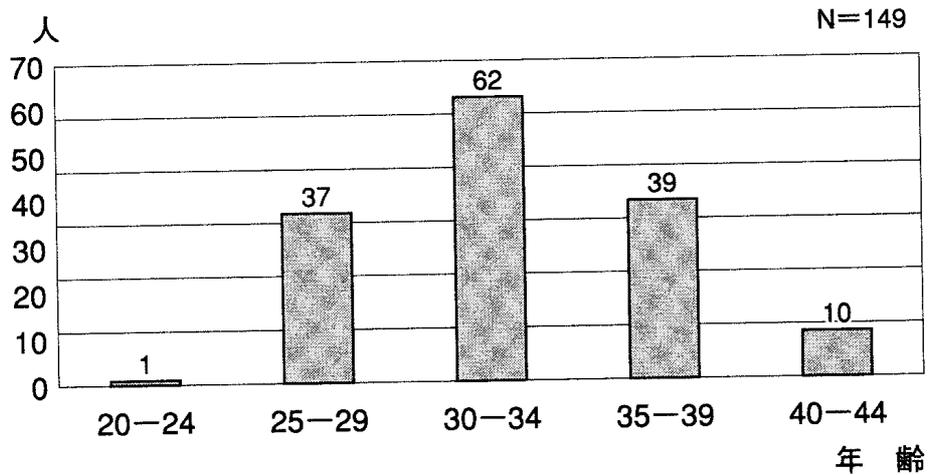


図4 母親の年齢

②母親の職業

無職者が63%，有職者が37%であった。有職者のうち全体の5%がパート勤務であった。(図5)

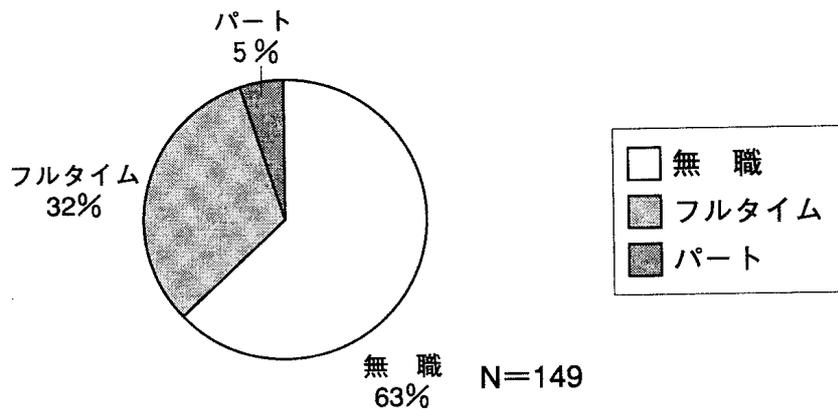


図5 母親の職業

③子どもの数

子どもの数は2人いる人が79人と一番多く，次いで1人いる人が38人であった。(図6)

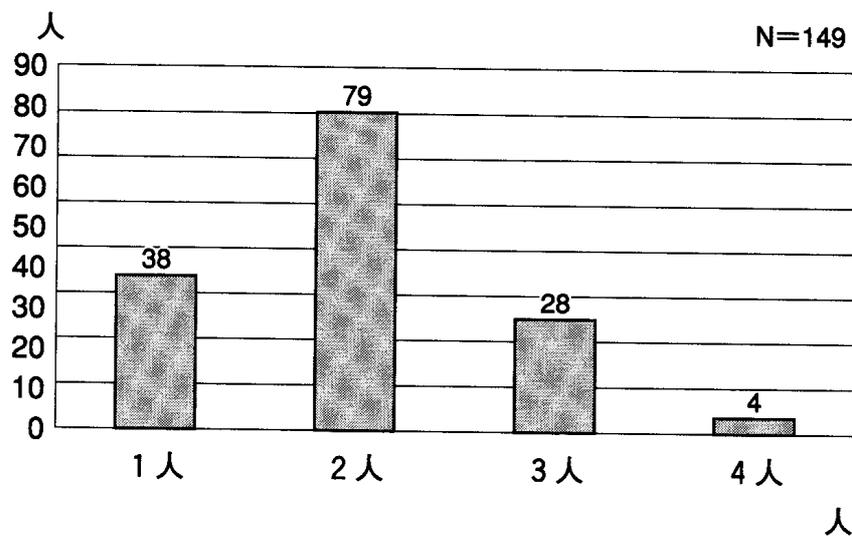


図6 子どもの数

3) 手続き

(保育短大生)

授業終了後、研究の目的、データの処理方法などの説明後、一斉に質問紙を配布し、その場で記入後、回収した。

(母 親)

①～② 3歳児検診終了後、研究の目的、方法、データの処理方法などの説明後、同意を得た母親のみに質問紙をその場で配布し、1週間後郵送にて返却してもらった。

③ 研究の目的、方法、データの処理方法などを記載した表紙を質問紙につけ、保育園にて質問紙を配布し、1週間後保育園に提出してもらった。

4) 回収率

(保育短大生) 100%

(母 親) ①K市 41%

②D市 64%

③O市 87%

5) 調査時期

(保育短大生) 2000年7月下旬

(母 親) 2001年6月上旬～8月上旬

6) 調査内容

予備調査で作成した質問紙を使用し、「全くそう思わない」を1,「全くそう思う」を6とする6段階の評定尺度を設けて質問紙を作成し、回答を求めた。

3 分析に使用したソフト

SPSS10.0J

JavaScript-STARver.2.8.3

結 果

1 因子分析の妥当性

Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度は0.863であった。

2 因子分析に基づく質問項目の選定

全項目において、回答の分布に極端な偏りが見られなかったため、「子ども観」33項目について、主因子解バリマックス回転による因子分析を行い、6因子を抽出した。なお因子負荷量が0.35以上となるような項目を抽出した。

<第1因子>

- ・子どもは元気がいい（活発である）
- ・子どもは身体を動かすことが好きである
- ・子どもは純粋である
- ・子どもは疑うことを知らない
- ・子どもは発想が豊かである
- ・子どもは思ったことをストレートに表現する
- ・子どもは何に対しても一生懸命である
- ・子どもは素直である
- ・子どもは好奇心が旺盛である
- ・子どもは無邪気である

以上の10項目に因子負荷量が高かった。

肯定的な子どもの特徴を表わすものとして「活発で純粋な存在」と命名した。

〈第2因子〉

- ・子どもは保育士や幼稚園教諭または親を成長させる
- ・子どもは環境によって影響を受けやすい
- ・子どもは子どもなりの世界を持っている
- ・子どもは一緒にいる人を元気づけることがある
- ・子どもはかけかえのないものだ
- ・子どもはおもしろい

以上の6項目に因子負荷量が高かった。

大人とは違う感性を持つ子どもの価値を認めるものとして「大切な存在」と命名した。

〈第3因子〉

- ・子どもはうるさい
- ・子どもは手間がかかる
- ・子どもはわがままで
- ・子どもはよく泣く
- ・子どもは大人のいうことをきかない
- ・子どもはすぐに母親を恋しが

以上の6項目に因子負荷量が高かった。

否定的な子どもの特徴を表わすものとして「手がかかる存在」と命名した。

〈第4因子〉

- ・子どもはあらゆる可能性をもっている
- ・子どもは感性が豊かである
- ・子どもはそれぞれの個性をもっている

以上の3項目に因子負荷量が高かった。

これから発達するであろう子どもの能力や可能性などへの期待を表わすものとして「能力を秘め、可能性ある存在」と命名した。

〈第5因子〉

- ・子どもはよくけんかをする
- ・子どもは喜怒哀楽が激しい
- ・子どもは大人が気付いていないことや見えないものをみている

以上の3項目に因子負荷量が高かった。

子どもは感情コントロールが未熟であることを表わすものとして「感情的な存在」と命名した。

〈第6因子〉

- ・子どもは知らないことが多い
- ・子どもは人間としては未完成である
- ・子どもは一人では何もできない

以上の3項目に因子負荷量が高かった。

子どもは保護が必要であることを表わすものとして「未熟な存在」と命名した。

以下ではここで得られた「子ども観」33項目6因子について検討する。分析にあたって、各項目1～6を1点～6点とし、因子を構成する各項目の合計得点をその項目数で割り、それを因子得点とした。また、各因子が下位尺度を構成し、これを子ども観尺度とした。(表3)

表3 因子分析

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
Q22 子どもは元気がいい(活発である)	0.712	0.300	0.013	0.003	0.035	0.124
Q8 子どもは身体を動かすことが好きである	0.659	0.050	0.267	0.100	-0.117	0.006
Q32 子どもは純粋である	0.570	0.087	0.006	0.458	0.034	0.125
Q23 子どもは人を疑うことを知らない	0.541	-0.010	0.234	0.029	0.152	0.217
Q26 子どもは発想が豊かである	0.515	0.429	-0.068	0.289	0.258	-0.072
Q33 子どもは思ったことをストレートに表現する	0.506	0.234	-0.004	0.077	0.268	0.047
Q20 子どもは何に対しても一生懸命である	0.497	0.211	-0.085	0.210	0.089	-0.027
Q19 子どもは素直である	0.468	0.302	-0.041	0.364	0.167	-0.107
Q18 子どもは好奇心が旺盛である	0.467	0.353	0.059	0.286	-0.003	0.042
Q1 子どもは無邪気である	0.408	0.303	0.132	0.050	0.127	0.002
Q3 子どもは保育士や幼稚園教諭を成長させる	0.082	0.610	-0.079	0.108	-0.023	0.052
Q6 子どもは環境によって影響をうけやすい	0.033	0.576	-0.067	0.120	0.187	0.016

Q29 子どもは子どもなりの世界を持っている	0.197	0.565	-0.051	0.242	0.257	0.066
Q10 子どもは一緒にいる人を元気づけることがある	0.397	0.521	-0.016	0.087	0.085	-0.145
Q5 子どもはかけがえのないものだ	0.247	0.455	0.057	0.171	-0.068	0.047
Q7 子どもはおもしろい	0.215	0.432	0.015	0.235	-0.033	-0.116
Q2 子どもは思ってもみない行動をとる	0.123	0.327	0.124	-0.020	0.057	0.013
Q11 子どもはうるさい	-0.004	-0.107	0.775	-0.033	0.022	0.066
Q30 子どもは手間がかかる	0.019	-0.119	0.690	0.085	0.079	0.222
Q4 子どもはわがままで	0.000	0.108	0.606	-0.047	0.168	0.136
Q16 子どもはよく泣く	0.053	0.214	0.586	0.002	0.095	0.229
Q27 子どもは大人のいうことをきかない	0.042	-0.209	0.558	-0.025	0.305	0.186
Q12 子どもはすぐに母親を恋しがる	0.116	0.274	0.534	0.116	-0.021	0.018
Q9 子どもの性格は生まれつきのものである	0.185	-0.086	0.258	-0.031	-0.109	0.109
Q31 子どもはあらゆる可能性をもっている	0.296	0.231	-0.046	0.626	0.031	0.015
Q15 子どもは感性が豊かである	0.284	0.463	-0.004	0.512	0.197	-0.081
Q13 子どもはそれぞれの個性をもっている	0.070	0.387	0.124	0.464	-0.057	-0.036
Q24 子どもはよくけんかをする	0.122	0.056	0.246	-0.062	0.515	0.012
Q28 子どもは喜怒哀楽が激しい	0.110	0.187	0.254	0.243	0.449	0.125
Q25 子どもは大人が気付いていないことや 見えないものをみている	0.186	0.395	-0.015	0.063	0.403	-0.216
Q17 子どもは知らないことが多い	0.042	0.117	0.332	-0.023	0.006	0.607
Q21 子どもは人間としては未完成である	0.083	0.003	0.219	0.023	0.003	0.440
Q14 子どもは一人では何もできない	0.063	-0.130	0.321	-0.035	0.027	0.419
回転後の負荷量平方和 (累積%)	21.153	32.063	35.986	38.530	40.564	42.268

3 子ども観・保育観尺度の信頼性

各因子の信頼性（内部一貫性）を確認するために、上で得られた各因子得点についてクロンバックの α 係数を算出した。結果は以下のとおりである。

表4 下位尺度の α 係数

下 位 尺 度	項 目 数	α 係 数
第1因子 「活発で純粋な存在」	10	0.85
第2因子 「大切な存在」	6	0.76
第3因子 「手がかかる存在」	6	0.81
第4因子 「能力を秘め、可能性ある存在」	3	0.70
第5因子 「感情的な存在」	3	0.52
第6因子 「未熟な存在」	3	0.58

表5 因子別グループ統計量

下位尺度	グループ	N	平均値	標準偏差
第1因子 「活発で純粋な存在」	短大生	115	5.17	0.49
	母親	149	5.38	0.58
第2因子 「大切な存在」	短大生	115	5.60	0.38
	母親	149	5.40	0.54
第3因子 「手がかかる存在」	短大生	115	5.17	0.49
	母親	149	4.49	0.75
第4因子 「能力を秘め、可能性ある存在」	短大生	115	5.58	0.48
	母親	149	5.52	0.56
第5因子 「感情的な存在」	短大生	115	4.86	0.65
	母親	149	4.87	0.79
第6因子 「未熟な存在」	短大生	115	3.37	0.84
	母親	149	3.95	0.84

4 二元配置の分散分析

因子得点の平均値をグループ（A：保育短大生，B：母親）×因子（6因子）で二元配置の分散分析を行った。その結果，グループAの主効果，グループBの主効果，A×Bの交互作用が有意であった。（表6）

表6 分散分析

A（グループ）=FactorA
B（10因子）=FactorB

S.V	SS	df	MS	F	
A	16.8531	1	16.8531	17.14	**
Sub	257.5549	262	0.983		
B	786.3777	5	157.2755	467.02	**
A×B	43.8666	5	8.7733	26.05	**
S×B	441.1563	1310	0.3367		
Total	1545.809	1583			

**p<.01

A×Bの交互作用が有意であったので下位検定を行った。（表7，表8）その結果，第1因子「活発で純粋な存在」において，グループの単純主効果が有意であり，因子得点は母親の方が高かった（F(1,262)=9.15 P<.10）。第2因子

表7 Analysis of A×B Interaction

S.V	SS	df	MS	F	
A atB1	2.7173	1	2.7173	9.15	**
Sub at B1	77.7730	262	0.2968		
A atB2	2.4946	1	2.4946	11.16	**
Sub at B2	58.5889	262	0.2236		
A atB3	33.7512	1	33.7512	54.54	**
Sub at B3	162.1442	262	0.6188		
A atB4	0.2172	1	0.2172	0.77	ns
Sub at B4	73.2209	262	0.2794		
A atB5	0.0000	1	0.0000	0.00	ns
Sub at B5	141.2509	262	0.5391		
A atB6	32.5394	1	21.5394	30.38	**
Sub at B6	185.7331	262	0.7089		
B atA1	578.6781	5	115.7356	343.67	**
B atA2	251.5662	5	50.3132	149.40	**
S×B	441.1563	1310			

+p<.10 *p<.05 **p<.01

表8 Multiple Comparisons by LSD

B atA1 Level		
Mse=0.3367	*	p<.05
LSD=0.1426		
B atA2 Level		
Mse=0.3367	*	p<.05
LSD=0.1426		

「大切な存在」において、グループの単純主効果が有意であり、因子得点は保育短大生の方が高かった ($F(1,262) = 11.16$ $P < .01$)。第3因子「手がかかる」において、グループの単純主効果が有意であり、因子得点は母親の方が高かった ($F(1,262) = 54.54$ $P < .01$)。第4因子「能力を秘め、可能性ある存在」において、グループの単純主効果は認められなかった。第5因子「感情的な存在」において、グループの単純主効果は認められなかった。第6因子「未熟な存在」において、グループの単純主効果が有意であり、因子得点は保育短大生の方が高かった ($F(1,262) = 30.38$ $P < .01$)。

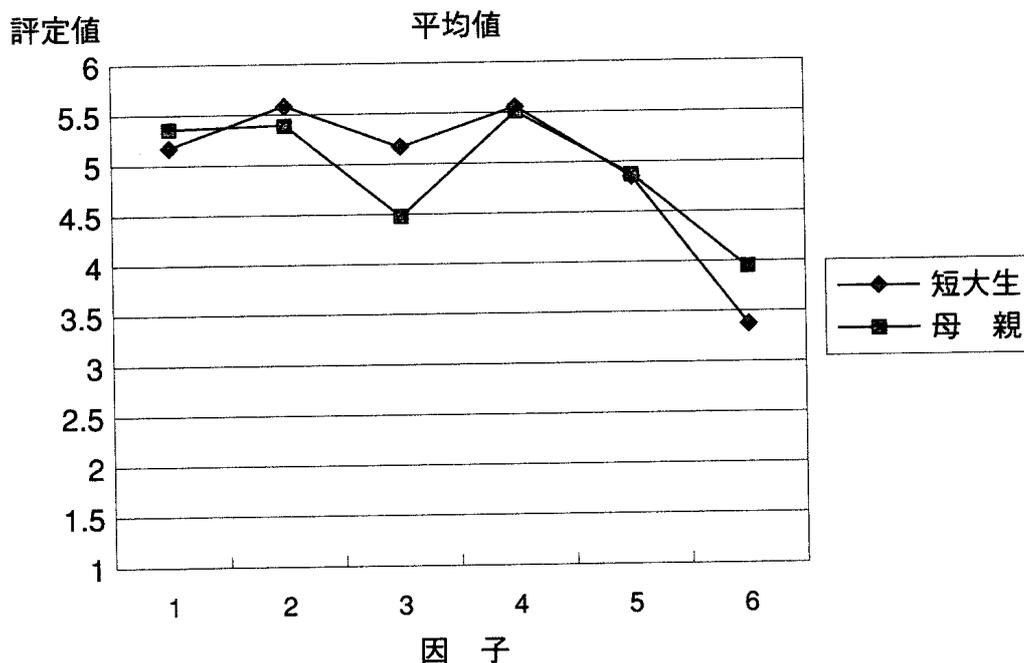


図7 分散分析結果

保育短大生グループにおいて、尺度間に因子得点の違いが見られた ($F=343.67$ 自由度 5 $P<.01$)。母親グループにおいても、尺度間に因子得点の違いが見られた ($F=149.40$ 自由度 5 $P<.01$)。

考 察

1 因子分析における妥当性・信頼性の検討

因子分析の妥当性については KMO (Kaiser-Meyer-Olkin) の標本妥当性の測度が0.863であることから因子分析を行うことの妥当性が認められた。

子ども観尺度の信頼性について、クロンバックの α 係数をみたところ、第1因子「活発で純粋な存在」は0.85、第2因子「大切な存在」は0.76、第3因子「手がかかる存在」は0.81、第4因子「能力を秘め、可能性ある存在」は0.70と0.70以上を示しており、ほぼ満足できるものであった。しかし、第5因子「感情的な存在」(3項目)は0.52、第6因子「未熟な存在」(3項目)は0.58とやや低い値であった。このことは項目数の少なさが影響しているものと考えられる。このことにより質問内容の再検討をする必要性が示唆された。(表4)

2 子ども観における因子分析の結果について

本研究で子ども観を“どのような存在とみるか”と定義したことから考えると、子ども観として「活発で純粋な存在」「大切な存在」「手がかかる存在」「能力を秘め、可能性ある存在」「感情的な存在」「未熟な存在」という6つの因子が得られた。これはかけがえのない大切な存在である、能力を秘め、可能性のある存在であると子どもを肯定的に捉えたものや、子どもの未熟さや感情が表に出やすいという特徴を否定的に捉えた子ども観を示している。また、永澤(1996)の先行研究の結果と比較すると、「活発で純粋な存在」「大切な存在」は永澤の“愛しい存在”という因子を構成している項目とほぼ一致しており、「手がかかる存在」「感情的な存在」も永澤の“否定的な存在”という因子を構成している項目とほぼ一致していた。また、「未熟な存在」も永澤の“不完全な存在”と“無知な存在”という因子を構成している項目とほぼ一致していた。

3 分散分析の結果について (図7, 表5, 表7)

「活発で純粋な存在」(第1因子)において、グループの単純主効果が有意であり、因子得点は母親が5.38、保育短大生が5.71で母親の方が高かった。しかし、保育短大生の因子得点は保育短大生だけで見たグループ内得点(被験者内得点)では3番目に高く、母親の得点と有意の差があるものの、短大生も子どもを「活発で純粋な存在」であるという捉え方をしていると言える。

「大切な存在」(第2因子)において、グループの単純主効果が有意であり、因子得点は保育短大生が5.60、母親が5.40で保育短大生の方が高かった。しかし、これも母親の因子得点は母親だけで見たグループ内得点(被験者内得点)では2番目に高く、保育短大生の得点と有意の差があるものの、母親も子どもを「大切な存在」であるという捉え方をしていると言える。

「手がかかる存在」(第3因子)において、グループの単純主効果が有意であり、因子得点は保育短大生が5.17、母親が4.49で保育短大生の方が高かった。3～5歳の子どもは自我が芽生え、好奇心が旺盛な時期である。そして同時に生活習慣や他者との関わり方を身に付ける時期でもある。また、ことの善し悪

しを自分の心の中でコントロールする機能が育つ時期ともされる。この時期の子どもはしつけを通して、外からの命令や禁止を自分のものとして内在化していく。保育者は集団においても一人一人、その個性に合わせたしつけを、繰り返し行っていく。集団の保育の中で一人一人を大切にしつつ、しつけていくということは時間を要するという意味で保育短大生にとって子どもは「手がかかる存在」なのであろう。また、保育短大生は母親よりも様々な子どもと接する経験がある。その経験を通して子どもが育つ過程においては多くの手がかかると思えているのであろう。

また、「未熟な存在」(第6因子)においても、グループの単純主効果が有意であり、因子得点は母親が3.95、保育短大生が3.37で母親の方が高かった。

母親は子どもの保護者という保護する立場にあり、子どもは保護されなければならないという母性の機能が保育短大生より強く表れたのであろう。また、母親が未熟と捉えること子どもの状態も保育者は発達のプロセスと捉え、子どもの未熟さとは捉えていないのかもしれない。母親という立場と保育者という専門職という立場が子どもの捉え方に違いを生じさせたのであろう。

「能力を秘め、可能性ある存在」(第4因子)と「感情的な存在」(第5因子)においては、グループの単純主効果は認められなかった。この2つの因子に関して保育短大生の平均値はそれぞれ5.58、4.86、母親の平均値はそれぞれ5.52、4.87とどちらもグループ内における得点は高かった。このことから保育短大生も母親も同じように子どもを「能力を秘め、可能性ある存在」「感情的な存在」と捉えていると言えるであろう。

以上のことから本研究ではあと数ヶ月で保育者となる保育短大生は子どもを「手がかかる存在」だと母親よりも思っており、母親は子どもを「未熟な存在」だと保育者(保育短大生)よりも思っていることが明らかとなった。しかし、保育者は子どもを「活発で純粋な存在」「大切な存在」とも捉えていることから考えると、肯定的な特徴と否定的な特徴の両面を持ち合わせている子どものありのままをよりの確に捉えているのであって、決して子どもを「手がかかる存在」として拒否しているものではないと思われる。また、子どもを「未熟な存

在」だと母親の方がより思っているが、グループ内得点（被験者内得点）のなかで一番得点が低いことから考えると溺愛のような偏った保護機能の現れとして子どもを未熟だと捉えているものでもないと思われる。

終わりに

今回、保育者と母親という立場の違いによって子ども観に大きな違いがあることが明らかとなったが、社会の中は社会のルールがあり、子どもたちは保育園での生活、経験を通してその社会のルールを学んでいく。また家庭は子どもの本来の素顔を表わす場所であるが、そこで保護者からの愛情を受け育っていく。このように保育園と家庭では子どもの置かれた環境も異なるので、保育者と母親において子どもの捉え方や関わり方が異なるのは当然であろう。しかし、集団の中で個を大切にし、関わりに時間をかける保育と家庭の中で保護や愛情を受けることはどちらも子どもにとって必要なことである。

平成12年に厚生省はすこやか親子21を策定し、親子の心の問題など新たな課題への取り組みをも見せている。子育て支援は国の施策としてますます力が注がれていくであろう。そのなかにおいて保育所でも様々な子育て支援が行われていくが、保育者が母親へ育児支援を行うにあたっては、この保育者と母親の子ども観の違いを踏まえて援助する必要があると考える。

今後の課題

今回、母親の調査対象者のうち63%が専業主婦であった。母親の職業の有無や地域性でも子どもの捉え方が異なることが考えられる。従って母親の職業や地域別からみた子ども観を見ていく必要がある。また保育短大生が実際に保育士となり保育の現場で重ねていく経験によってどのように価値観が変化するかも見えていく必要がある。

引用文献・参考文献

- 1) 『平成10年度版 厚生白書』 監修厚生省 平成10年発行 PP.84
- 2) 『ハンディー保育所保育指針』 全国社会福祉協議会・全国保育士会1999 PP.186-188
- 3) 「母親の子ども観と養育態度の関係」 永澤道代『追手門学院大学心理学論集』第4号 PP.11-21 1996
- 4) 「大学生の“子ども観”に関する研究—保育職志望度との関連で—」 嘉数朝子他『琉球大学教育学部紀要』第51集 PP.207-213 1997
- 5) 「女子短大生の“子ども観”に関する研究II—保育職志望度と地域特性との関連で—」 島袋恒男他『琉球大学教育学部紀要』第52集 PP.193-199 1998
- 6) 「保育科学生の子ども観及びライフスタイルの変化に関する調査研究」 島田俊朗他『徳島文理大学研究紀要』第58号 PP.117-185 1999
- 7) 『現代保育用語辞典』 岡田他著 株式会社フレーベル館 PP.190 1997
- 8) 『乳幼児の心理学』 内田伸子他著 株式会社有斐閣1991
- 9) 『幼児の心理と保育』 無藤隆編 株式会社ミネルヴァ書房 2001
- 10) 『保育白書1999年版』 全国保育団体連絡会編 株式会社草土文化 1999
- 11) 『発達』 No.84, Vol.21 杉田啓三発行 株式会社ミネルヴァ書房 2000
- 12) 『変化する社会と家族』 槇石多希子他 健帛社1998
- 13) 『21世紀の親子支援』 中野由美子他編著 プレーン出版 1999
- 14) 『乳児の保育』 千羽喜代子編著 萌文書林 1999
- 15) 『家庭との連携と子育て支援』 新澤誠治他著 株式会社ミネルヴァ書房2000
- 16) 『幼稚園が変わる 保育所が変わる』 森田明美編 株式会社明石書店 2000
- 17) 『乳幼児発達心理学』 繁多進編 福村出版株式会社 1999
- 18) 『ガイド乳幼児心理学』 今泉信人著 北大路書房 1994
- 19) 『乳児の保育新時代』 乳児保育研究会編 ひとなる書房 1997
- 20) 『子ども理解とカウンセリングマインド』 青木久子他編 萌文書林 2001
- 21) 『こどもの発達・学習・社会化』 柏木恵子 有斐閣選書 1978
- 22) 『子育てと出会うとき』 大日向雅美 NHK ブックス 1999
- 23) 『子どもの心理』 波多野完治 講談社学術文庫 197